

要旨

音読は口頭表現能力や文脈理解能力を向上させる効果がある。学習者の表現力や理解力などを上達させるために、発音、会話、読解などの指導において、適切な音読練習を導入する必要がある。

日本の国語教育は、初等教育から中等教育までの教育方針や成人を対象とした言語活動では、音読と朗読のトレーニングが重要な項目として位置づけられており、言語能力の育成および口頭表現の指導において重要視されている。一方、日本語教育の現場では、CEFR と JF Standard が多様なコミュニケーション言語活動を提示しているにもかかわらず、「産出」の言語活動において Can-do の概念を導入した音読や朗読の練習が不足しており、また、音読や朗読に関する段階別能力目標の提示と教材選択の基準が欠けているため、効果的な音読指導が難しい状況である。特に、海外の日本語教育環境では、JFL 日本語学習者が音読や朗読などの学習活動に接する機会が少なく、音読練習を授業に取り入れることも少ないのが現状である。

日本語教育における音読指導の不足を改善するために、本研究では CEFR や JF Standard の言語能力指標を参考に、A1～A2 レベルの音読能力記述文の作成を試みる。同時に、言語と文化という二つの要素を取り込んだ紙芝居教材を対象とし、「jReadability 日本語文章難易度判別システム」で検索し、音読教材のレベル分けおよび活用方法を提案したい。

キーワード：紙芝居、音読、教材、JFL、Can-do